

発掘調査の成果、『島崎川流域遺跡群の研究Ⅱ』として刊行

○内容

新潟大学研究推進機構超域学術院の森 貴教・助教が代表をつとめる島崎川流域遺跡調査団は、『長岡市島崎川流域遺跡群の研究Ⅱ 上桐の神社裏遺跡2 赤坂遺跡1』を刊行した(写真1)。本書は、令和3(2021)年9月下旬に実施された、新潟県長岡市に所在する上桐の神社裏遺跡と赤坂遺跡の発掘調査の結果と関連研究の成果をまとめたものである。

近日中に奈良文化財研究所の全国遺跡報告総覧に公開される。

1. 上桐の神社裏遺跡第3次調査(新潟県長岡市上桐字桐畑)

低丘陵の裾部に位置する、弥生時代中期後半～後期(前1世紀～2世紀)を中心とする時期の遺跡である。フルイを用いた遺物の選別によって鉄石英(チャート)製の管玉(くだたま)が1点出土した(写真2)。全長22.3mm、直径2.8mmの細長い円筒形で、弥生時代後期～終末期(1世紀～3世紀前半)に作られたものとみられる。本書の考察では、X線CTおよび走査電子顕微鏡(SEM)による孔の内面の観察に基づき、鉄針で孔があげられたと推定されている。その他、出土した磨石・敲石類1点から2粒の残存デンプン粒が検出され、サトイモ科テンナンショウ属(*Arisaema*)がその候補として挙げられている。

2. 赤坂遺跡第1次調査(新潟県長岡市寺泊入軽井字千石塚)

標高90m前後の丘陵の主稜線上に位置する、弥生時代後期を中心とする時期の高地性集落遺跡である。山道脇の切通面で、上端幅約7.4m、深さ約2.2m以上の「V」字形の溝の断面を検出した(写真3)。立地環境から、尾根を断ち切る「条壕」としての性格が考えられる。溝の下部は山道の路面よりさらに下方に延びており、最深部で深さ約4.3mと推定される。炭化物の放射性炭素年代測定の結果をふまえると、溝の上部は鎌倉時代(12～13世紀頃)に掘り返されたとみられるものの、弥生時代後期後半の土器もわずかに見つかっていることから、弥生時代の遺構と考えられる。弥生時代の高地性集落とともなう溝であれば、新潟県内で最大規模の事例とみられる。なお、溝からは炭化イネ2粒と炭化オオムギ1粒が出土した。溝の規模や構造、年代については今後の課題である。

(用語解説)

管玉：円筒形で、縦方向に孔があげられた玉。勾玉とともに弥生時代の主要な玉である。

高地性集落：弥生時代の集落遺跡のうち、水田稲作に不向きと思われる高地に立地する遺跡。中国史書に書かれた「倭国大乱」との関連が議論されている。

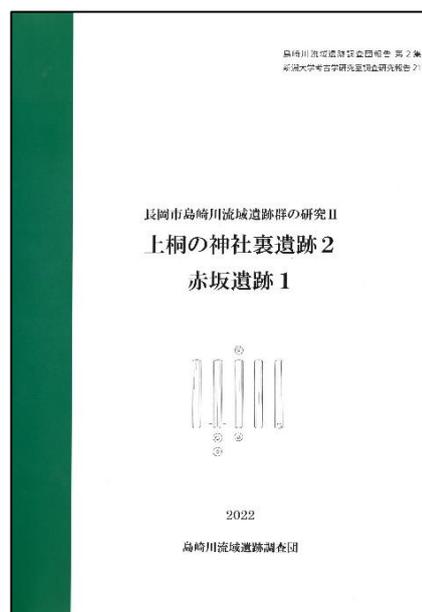


写真1 本書の表紙

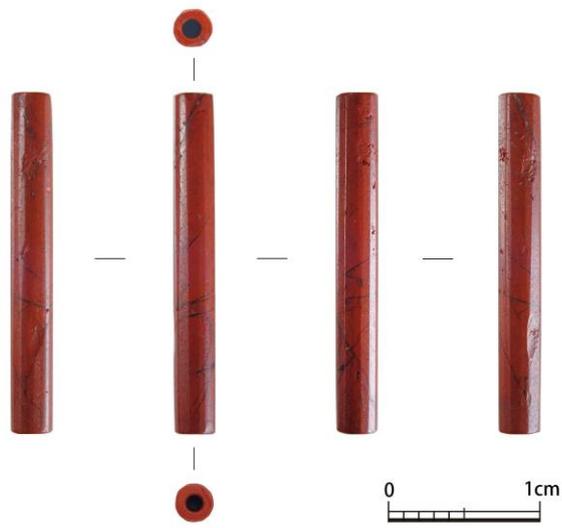


写真2 上桐の神社裏遺跡第3次調査出土の管玉



写真3 赤坂遺跡第1次調査で見つかった溝の断面